

## 講評

記念すべき第1回となる今年度の表彰においては、全国各地から33件のご推薦を頂きました。国土交通分野のバリアフリーがここ数年で着実に進んできていることを裏付けるように、レベルの高い取組みを数多くご推薦頂きました。これらは、ハードからソフトまで広範囲にわたっており、バリアフリーに関する取組みが、多様に幅広く展開されていることの表れと思われまます。

ハードに関しては、複数事業・施設の連携や地域の一体的整備に関するものが目立ちました。これは、バリアフリー新法の目指すところでもあり、このような点で優れたものを評価いたしました。ソフトに関しては、住民等による自主的な活動が目立ちました。言うまでもなく、住民活動は、「継続性」と「波及性」が重要なポイントですので、このような視点を有する活動を積極的に評価しました。また、ハードとソフトを併せ持つ先進的なバリアフリー活動は、今後の全国的な展開モデルになると考えられます。これらの多様な取組みのバランスも考慮しつつ、表彰対象を選定いたしました。

「さいたま新都心バリアフリーまちづくりボランティア」につきましては、さいたま新都心にお



秋山 哲男 委員  
(首都大学東京 教授)

いて、まちの案内、車いす補助や視覚障害者誘導など移動支援、車いす体験などの擬似障害者体験補助、5カ国語(日・英・中・韓・ポルトガル語)ガイドマップ配布、手作りマップ作成、各種イベントの企画・実施等の取組みを行っております。

特に、市外から来訪する団体等への対応など活動対象が地域的に広範囲に及んでいること、小中学校への対応などによるバリアフリー化推進を次世代に受け継ぐ取組みを評価しました。また、活動の継続性についても評価し、表彰対象に選定いたしました。

「特定非営利活動法人伊勢志摩バリアフリーツアーセンター」につきましては、日本初のバリアフリー観光の案内システム(施設等の調査、アドバイス、案内、情報提供等)を行う「バリアフリーツアーセンター」を運営しております。

特に、障害者や高齢者の集客を劇的に伸ばしていること、障害者を含む市民が立ち上げ、着実に取組みを継続し、かつさまざまな先駆的事業を展開している点を高く評価し、表彰対象に選定いたしました。また、従来の観光のパターンを大きく変える取組みであり、特に一般的な観光では障害者・高齢者が排除されることが多かった点を克服する試みとして、新しいツーリズムの方向を示唆したものとして評価しております。

「豊中市」につきましては、「基本構想検討委員会」のもとで、積極的なバリアフリー化を進めています。

特に、市内13駅のすべてについて基本構想を策定し、高いレベルで改善を図るとともに、「特定道路」を補うネットワーク道路についても積極的に計画に位置づけるほか、特定事業の設計・工事段階から事業の進捗管理、継続的改善まで、一貫して障害のある市民によるチェックシステムを構



高橋 儀平 委員  
(東洋大学 教授)

築するなど、取組み・体制ともに優れている点を評価し、表彰対象に選定いたしました。

「廿日市市」につきましては、踏切によって分断されていたバス停と鉄道駅を一体的に整備したものです。

交通結節点の機能強化に併せて、段差のない構造での一体化によるシームレス（継ぎ目のない）なバリアフリー化を図っている点を評価しました。また、異なる交通モードの事業者の連携事例であること、むしろ単純な事例であることによる波及効果の可能性を評価し、表彰対象に選定いたしました。

これは、都市空間が狭隘であることを理由に、他の多くの地域でも試みることができなかった事例です。カタチは単純ですが、しっかりした都市像を持っていないとなかなかできるものではありません。このように、良い都市づくりの方向を示したという点でも評価いたしました。

「宮崎市」につきましては、特に、民間建築物について、積極的なバリアフリー化促進策を講じております。

「福祉のまちづくり条例」の対象の拡大、基準適合証の積極的な発行、改修工事に対する助成等により、バリアフリー化を強力に促進するほか、

建築物のバリアフリーの状況をホームページや情報誌により積極的に市民に情報提供するなどの取組みを評価しました。

また、現在では、これらの取組みに加え、優れたデザインの民間建築物の顕彰等を予定しているほか、「観光バリアフリー」実現のための活動などの継続も評価し、表彰対象に選定いたしました。宮崎市がこうした努力を継続できた裏には、職員のバリアフリーの継続的努力があったためと考えられます。このような点も、評価できると考えております。

今回受賞とはならなかったものにも、優れた取組みが数多くありました。なお、すでに国による関連表彰を受賞している団体につきましては、表彰の機会を広く与えたいとの観点から、選考過程において敢えて表彰を控えることとしました。

受賞された方々も、また、残念ながら受賞とはならなかった方々にも、引き続きこのような素晴らしい取組みを進めて頂くことを期待するとともに、これにより、わが国の生活環境のバリアフリー化がさらに進展することを、選考委員一同、祈念しております。

< 選考委員一同 >



三星 昭宏 委員  
(近畿大学 教授)